

中世石見国高津川・益田川河口域港湾の基礎的研究

A Fundamental Study of the Port in the Takatsu and Masuda River Basins in Iwaminokuni in Medieval Times
TANAKA Hiroki

田中大喜

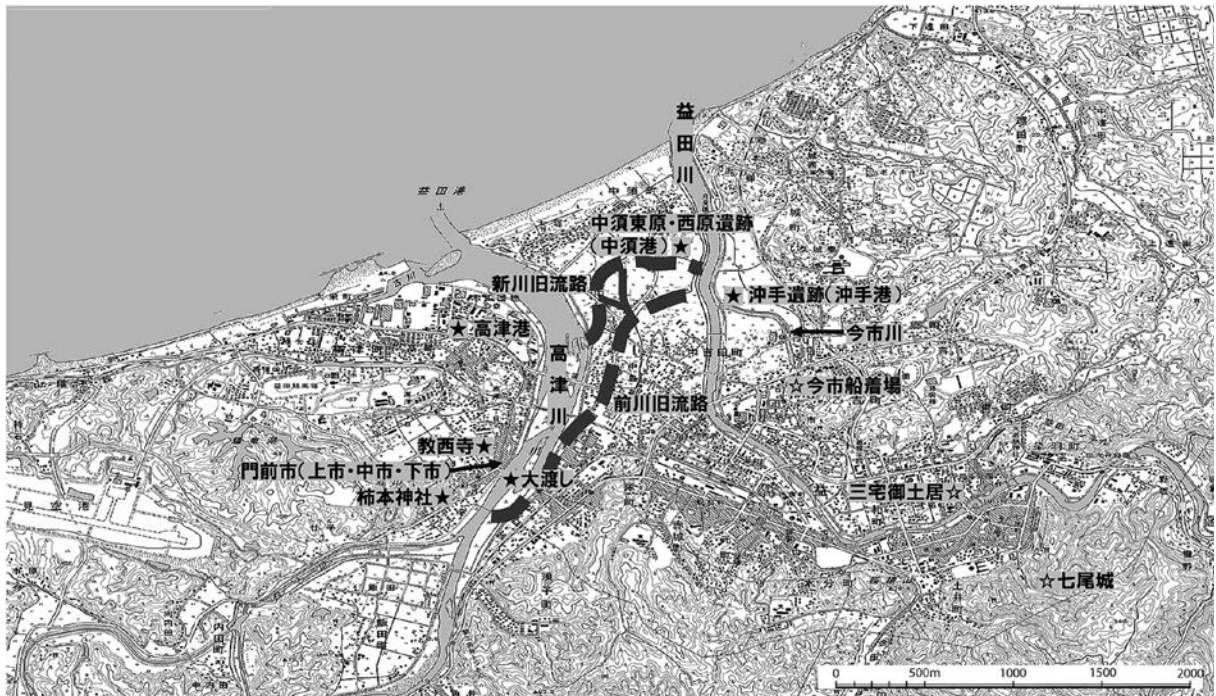
はじめに

島根県益田市を流れる高津川と益田川は、現在ではそれぞれに河口を持つ別個の河川として存在している。しかし、十八世紀末までは、高津川の支流が最下流域で益田川に流れ込んでいたため、最下流域の両河川は一体化して存在していた。そして、高津川の支流と益田川の合流地点には、中世の幕開け時期となる十一世紀後半～十二世紀後半にかけて、二つの港が成立したことが知られている。このことをいまに伝える遺跡が、沖手遺跡と中須東原・西原遺跡である〔図1〕参照。

前者は、現在の益田川河口から一キロメートルほど遡った、前川（高津川の支流）と今市川（かつての益田川本流）と益田川の合流地点の北東域に所在する遺跡である。本遺跡からは、道路・溝・柵列・建物（掘立柱建物と方形堅穴建物）・井戸・墓などから構成される集落遺構が検出された。また、遺構が密集する中心区域からは、十一世紀後半～十二世紀前半の中国産白磁が多数出土した。このことから、本遺跡は十一世

紀後半～十二世紀前半に港湾集落として成立したと考えられており、当該期の港湾集落の具体相がうかがえる希少な遺跡となっている。一方後者は、益田川を挟んだ、前者の対岸に位置する遺跡である。本遺跡からも、沖手遺跡と同様の集落遺構が検出されたが、前者からは検出されなかった鍛冶炉・鉄滓廃棄土坑といった鍛冶関連遺構や、港湾施設の一部と見られる礎敷き遺構が検出されたことが注目を集めた。また、中国陶磁器から見た本遺跡の最初の盛期は、十二世紀中葉～後半に求められることから、本遺跡は前者にやや遅れて成立した港湾集落と考えられている。

このように高津川の支流と益田川の合流地点＝益田川の河口域には、十一世紀後半～十二世紀後半にかけて沖手遺跡と中須東原・西原遺跡という二つの港湾集落Ⅱ港が成立した（以下、それぞれの港の名称を沖手港と中須港と呼称する）。両港とも中世を通じて存続したため、これらの遺跡からは国内産の中世陶器・土器はもとより、当該期の中国陶磁器や朝鮮陶磁器も大量に出土しているほか、少量ながら東南アジア産の陶磁器も出土している。このような両遺跡から出土した豊富な交易関連遺



【図1】 高津川・益田川下流域図
(25,000分の1「益田市図」に加筆)

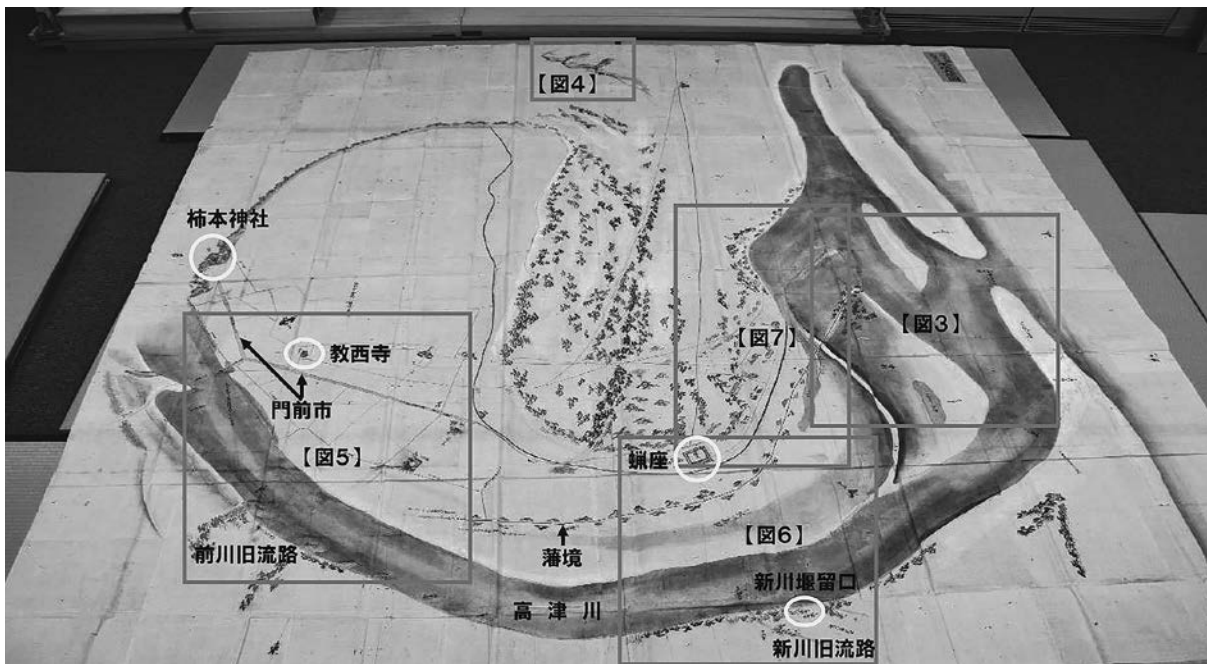
物は、中世の西日本海交通・流通の様相を明らかにするうえで重要な資料となっており、これらの分析を通じてその様相に迫る研究成果が蓄積されつつある⁽²⁾。しかしながら、その一方で、益田地域あるいは西日本海海域における両港の位置づけ(役割)がまだまだ曖昧なため、中世の西日本海交通・流通の様相理解をいっそう深化させるためにも、その究明の必要性が指摘されている⁽³⁾。

こうした研究状況のなか、最近新たに発見された中世文書⁽⁴⁾により、高津川本流の河口域に所在した高津郷にも、十三世紀前半には港が成立していたことが明らかになった(以下、この港の名称を高津港と呼称する)。したがって、中世段階の高津川・益田川の河口域には三つの港が存在したことになるが、上記の課題に鑑みると、中世の西日本海交通・流通の様相理解をいっそう深化させるべく、益田地域あるいは西日本海海域におけるこれら三つの港の位置づけを明らかにする作業が求められよう。そのためには、まず、これまで研究の蓄積がない中世の高津港の様相を明らかにしなければならないと考える。

そこで本稿では、中世の高津港の様相について追究するとともに、中世の高津川・益田川の河口域に形成された三つの港の関係性について検討する。これにより、今後、益田地域あるいは西日本海海域におけるこれら三つの港の位置づけを究明していくうえでの足場を築きたい。

一 「石見国高津川水域大絵図」の考察

冒頭で触れた最近新たに発見された中世文書は、中世の高津港の存在を示すものの、その様相については何も記されていない。また、文書によつて存在が確かめられたことからわかるように、高津港は発掘調査がいつさい行われていないため、遺構からその様相を探ることもできない。現時点では、中世の文献・考古資料から高津港の様相についてアプローチすることは難しい状況にあるわけだが、まったく手がかりがないとい



【図2】「石見国高津川水域大絵図」全体

うわけではない。というのも、近世に描かれた高津川河口域の絵図が現存しており、この絵図を手がかりに中世の高津港の様相解明にアプローチすることができると考えられるからである。

この近世に描かれた高津川河口域の絵図とは、島根県立古代出雲歴史博物館に所蔵されている「石見国高津川水域大絵図」である（【図2】参照）。本絵図は、二〇一七年度に同博物館が古書肆より購入したもので、いまだ資料紹介もされていない状況にある。そこで本章では、資料紹介を兼ねながら本絵図の書誌学的考察を行ったうえで、そこに描かれた近世段階の高津港の様相について検討してみたい。⁽⁵⁾

1 書誌学的考察

まずは書誌学的考察を行う。外観から検討してみよう。本絵図は、法量が三五八×三四七センチメートルの大判の絵図となっている。西側に当たる一方の隅には、本紙とは異なる紙で「石見国高津川水域大絵図」という題簽が貼られている。ただし、これが本絵図の作成と同時に貼られたものかは不明である。全体に彩色が施されており、河川や水溜まりは青、草木は緑、道路は薄い朱、高津川で境界を接していた津和野藩と浜田藩の藩境は濃い朱で示されている。また、海岸部や高津川の河口域、そしてその背後の松林には白色が施されているが、これは砂丘を表していると見られる。

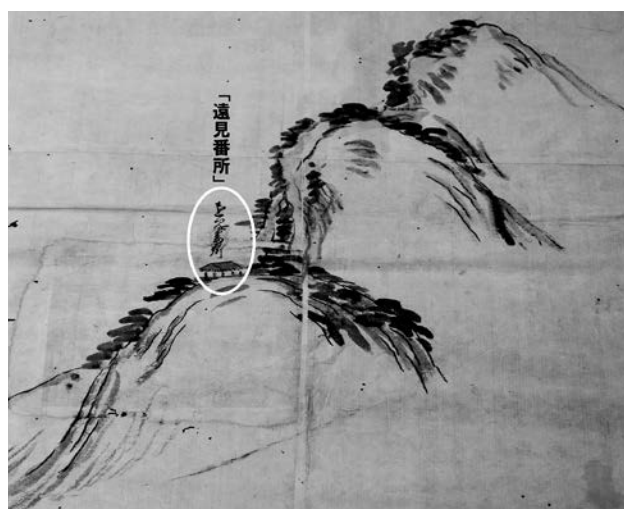
海岸部や高津川の河口域が描かれていることからわかるように、本絵図は高津川の最下流域の様子を描いたものであり、描かれた範囲は中世の高津郷故地である近世の高津村におおよそ該当すると見られる。しかし、本絵図の南側半分は道路と河川以外の様子がほとんど描かれていないのに対し、河口域に当たる北側半分はその様子が詳細に描かれており、高津村の南北の様子が対照的に描かれていることが確認できる。このことから、本絵図の関心は高津村全体ではなく、もっぱら高津川の河口域



【図3】「石見国高津川水域大絵図」高津川河口域

に寄せられていることがうかがえる。実際、河口域を見てみると、河口の幅や砂丘の幅・長さが記されている（【図3】参照）ほか、次節で検討する高津港に関わる港湾施設も描かれていることが確認できる。また、西側に描かれた山の一つには遠見番所が描かれている（【図4】参照）が、これも港湾施設の一部として描かれたものだろう。

このように本絵図は、高津川の河口域の様子を詳細に描いている点に特徴を有するといえるが、高津川を遡って見ていくと、南側半分には描かれた高津川にも川幅が記されているほか、水刳や堰留といった治水施設が描かれていることが確認できる（【図5】参照）。つまり、本絵図は全体的に高津川に関わる情報を詳細に記載していることがわかり、高津川を軸にその最下流域の様子を示すことが本絵図の趣旨であったと理解できるのである。「石見国高津川水域大絵図」という本絵図の書名は、このような趣旨を表していると考えられよう。



【図4】「石見国高津川水域大絵図」西側部分

この点に関して、本絵図には津和野藩領であることを示す記載がいっさい見られないのに対し、浜田藩領になる高津川右岸の堰留には「浜田御領堰留」（図5）参照）、また津和野藩と浜田藩の藩境の東側＝浜田藩領側には「浜田御領飛地」（図6）参照）という記載が見えるが、これらはその傍証となる。そして、これらの記載に着目すると、津和野藩当局は浜田藩領域も含めて高津川の最下流域の様子を描いたことに気づく。津和野藩は、高津川の最下流域に並々ならぬ関心を寄せていたことがうかがえるわけだが、本絵図作成の動機とはいったいかなるものなのだろうか。管見の限りでは、このことを直接に示す文献史料が見当たらない。そこで、本絵図の内容からその作成時期を推定し、そこから作成動機について考えてみたい。

本絵図の作成時期を推定するにあたり、注目すべきは、そこに描かれた創設時期ないしは移転時期の判明する施設である。すなわち、柿本神社・教西寺・新川堰留口・蠟座がこれに該当するが、結論を先に述べると、これらのうち本絵図の作成時期の上限を示すのが新川堰留口で、下限を示すのが蠟座となる。以下、このことを確認してみよう。

まず、新川堰留口が上限を示す点について見てみる。新川堰留口は、浜田藩領になる高津川右岸に描かれている（図6）参照。新川とは、かつて益田川に流れ込んでいた高津川の支流の一つだが、本絵図には「此川筋新田」と見え、その作成時には堰留めによって川の流れは消滅し、流域は新田になっていたことがわかる。次の史料は、新川が堰留められた時期を考えるうえで注目される。

【史料1】「中須自治会所蔵文書」⁽⁶⁾

乍恐奉願上口上覚

益田川筋中須浦湊口 先年者高津・益田両方より水引受、常々水勢能、川口深く、地船・他船出入自由能、其上諸商内等も浦町共賑敷、



【図5】「石見国高津川水域大絵図」大渡し・前川旧流路付近

諸事弁シ宜敷御座候、然ル処、^①此以前高津川筋中野嶋村大中屋塞留出来以後者、水勢弱く、川口悪敷罷成、諸廻船出入不相成、自然と諸商内不弁シ浦町共困究仕候、其上高津川江船繁候故、手遠二而万事不自由諸費多く、荷物積揚運送等も余分相懸り、彼是甚難渋至極仕候、殊二是迄之通二而ハ、年々洪水之節、所々損シ所等も出来可仕哉、乍恐其段も難斗奉存候、依而千万恐多御願二奉存候得共、以御慈悲、以前之通高津川より分水相成、右塞留又者名越此両所之内、平水流れ川船通路仕、諸弁シ宜追々水勢能相成候ハ、自然と得ハ当分より川船通路仕、諸弁シ宜追々水勢能相成候ハ、自然と湊口宜敷可相成、浦町共賑敷相成、無此上一統難有仕合奉存候、何卒以御憐愍願之通被為 仰付被下置候様、宜敷被仰上可被下、此段偏二奉願上候、以上、

寛政八年^{〔七九六〕}

辰正月廿八日

中須浦惣代

六郎兵衛(判)

久左衛門(判)

遠田浦惣代

文三郎(判)

権三郎(判)

津田浦惣代

貞八(判)

大谷浦惣代

弥十郎(判)

大浜浦惣代

庄蔵(判)

(中略)

児玉伝三郎 様

大賀忠左衛門様

寛政八年に浜田藩領の中須浦以下五つの浦の惣代たちが、中須浦へ高津川から分水することを藩に訴えるように、益田浦大年寄の大賀忠左衛門と児玉伝三郎に求めた口上覚である。傍線部①には、この訴えの原因となった出来事が記されている。すなわち、以前に高津川流域の中野嶋村にある大中屋を塞ぎ留めたところ、益田川の水勢が弱まって河口が狭まったため、中須浦が面する益田川へ廻船の出入りできなくなったとあり、浜田藩が大中屋で高津川の水を塞ぎ留めたことが、今回の訴えの原因になっていることがわかる。そして、傍線部②には、これまでのように高津川の水が益田川に流れ込んだままでは、毎年洪水が起きるたびに損害を受ける村が跡を絶たないと見え、大中屋での高津川の塞ぎ留めは、浜田藩の洪水対策の一環として行われたことがうかがえる。しかし、これによって中須浦では、廻船の出入りが不可能となって商売不振に陥ったので、藩の洪水対策に理解を示しつつも、再び高津川から分水するよう訴えたのである。

さて、本史料で注目すべきは、傍線部①に見える大中屋である。というのも、【図6】に見えるように、本絵図にも新川堰留口はその名称を確認でき、【史料1】に見える大中屋の塞ぎ留めとは、新川の堰留めのことと判明するからである。しかし、【史料1】には「此以前」としてしか記されていないため、新川を堰留めした正確な時期は明らかにならない。だが、新川の堰留めによって中須浦が窮状したことを訴えている点を踏まえると、その時期は本史料からさほど離れた時期とは考えにくく、ひとまず寛政元年～七年(一七八九～九五)頃と想定するのが妥当と考える。これに対し、もともと別の場所にあった柿本神社と教西寺が本絵図に描かれた場所に移転した時期は、それぞれ延宝九年(一六八一)と元文三年(一七三八)であるから、新川が堰留められたと想定される寛政元年～七年の方が新しいことになる。したがって、これが本絵図作成時期の上限になると考えられるのである。

次に、下限を示すと考えられる蠟座について見てみよう。延享二年（一七四五）に津和野城下に設けられた蠟座は、宝暦十二年（一七六二）に高津村に移され、その後、文化八年（一八一二）には同村の御蔵米中場の場所に移転したという⁽⁸⁾。本絵図には、高津港の港湾施設の一つとして御米中場が描かれている（後掲【図7】参照）が、これが御蔵米中場に当たると見られる。すると、本絵図の蠟座は御米中場とは別の場所に描かれていることから、本絵図は最も遅くとも文化八年の様子を描いたことになり、これが作成時期の下限になると考えるのである。以上の検討により、本絵図の作成時期は、寛政元年～文化八年の間に絞られると考えられよう。

それでは、作成時期をさらに限定することはできないだろうか。ここで注目されるのが、本絵図の高津川河口に記された「丑三月廿八日見分、水上凡四拾間余」という記載である（【図3】参照）。すなわち、ここには丑年の三月二十八日に見分した河口の幅が記されているが、この丑年が本絵図の作成に関係すると予想されるのである。そこで、寛政元年～文化八年のなかで丑年に当たる年を調べてみると、それは寛政五年（一七九三）と文化二年（一八〇五）と判明するが、後者の方が妥当性が高いと考えられる。なぜならば、本絵図の高津川河口には「新湊切口」という記載も見えるが、これは文化元年五月の高津川の洪水により、河口が東へ大きく移動し新たに開いた事実を示していると理解でき、「丑三月廿八日見分、水上凡四拾間余」という記載は、その翌年にこれを見分した記録と捉えられるからである。

このように本絵図は、文化元年の高津川河口の移動に関する蓋然性が高いと判断される。すると、高津川河口の「新湊切口」という記載、および津和野藩と浜田藩の藩境が、本絵図作成の動機と時期を知るうえでの重要な糸口になると考えられる。

すなわち、「新湊切口」という記載は、前述したように、文化元年の



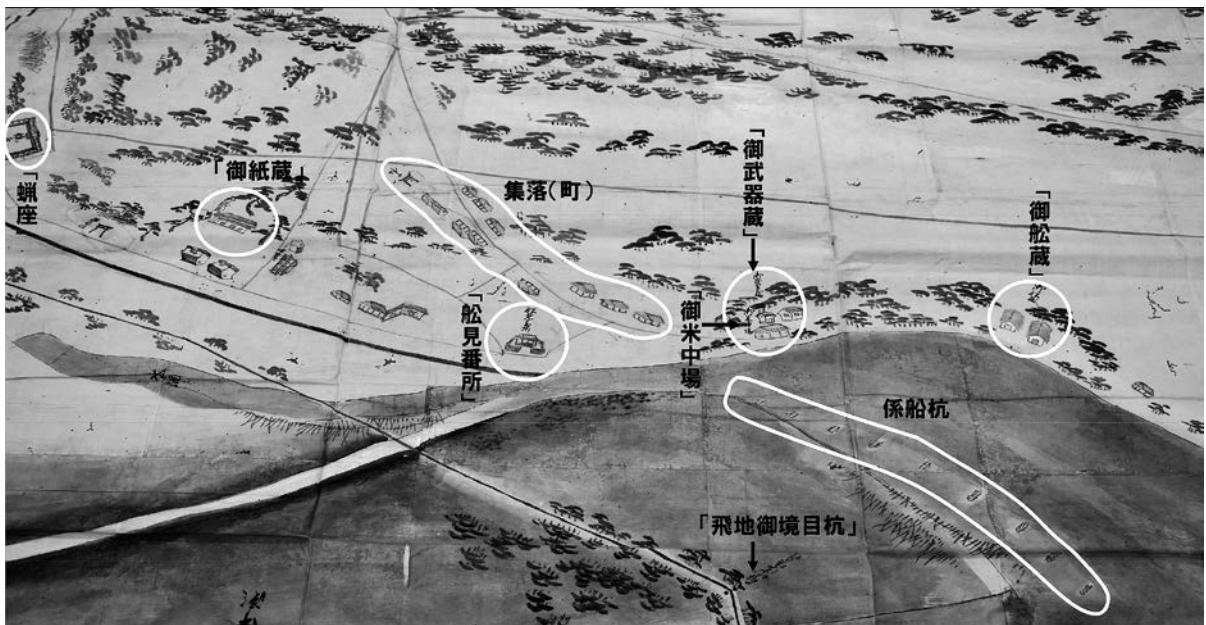
【図6】「石見国高津川水域大絵図」新川旧流路付近

洪水を受けて河口が東へ大きく移動した事実を示している(10)と理解でき(10)る。そして、津和野藩と浜田藩の藩境は、北端がこの「新湊切口」を向いていることが確認できる(【図3】参照)ことから、高津川の河口を起点に藩境が設定されていた様子がうかがえる。すると、前年の洪水を受けて高津川の河口が大きく移動したことに伴い、藩境にも影響が生じたため、津和野藩と浜田藩は互いに藩境を確認し直す作業が必要となり、これを実施したはずだと考えられる(11)。したがって本絵図は、こうして実施された藩境の再確認作業の結果、再確認された藩境の現況を津和野藩側が記録するために、作成されたものと考えられよう。その時期は、丑年(文化二年)から、本絵図作成時期の下限となる文化八年までの間となる。前述したように、津和野藩は浜田藩の領域も含めて高津川の最下流域の様子を描いたが、これはこのような本絵図の作成動機に鑑みると、自然なことと了解できるだろう。

2 近世高津港の考察

それでは次に、【図7】として掲げた、本絵図に描かれた近世段階の高津港の様相について検討する。まずは地形から見ていこう。

前近代の港湾は、自然地形に大きく依存した状態から、人工造成地や護岸・雁木などを施すことによって、次第にそうした状態を超越していったと把握されている(12)。しかし、本絵図に描かれた高津港には、係船杭以外はそうした様子が認められず、基本的には自然地形に依存した状態だったことがうかがえる。だが、実際に検出されて存在が確認できている、絵画史料には、港湾施設の一つと目される礫敷きは描かれないう指摘に鑑みると、近世の高津港も係船杭以外に人為的な造成が施されていた可能性はあるように思われる。実際、至近にあった中須港からは礫敷き遺構が検出されていることを想起すると、その可能性は高いと思われる、今後の発掘調査を待ちたい。



【図7】「石見国高津川水域大絵図」高津港

さて、高津港の地形的特徴として注目されるのは、それが高津川の河口域に形成されたラグーンに面しており、潟港として存在したという点である。というのも、一般的に潟港は弥生時代～平安時代初期に最もよく機能し、それ以降は潟の埋積が進んで港湾機能を大幅に低下・喪失したと見られるケースが多いといわれているが、高津港は十九世紀初頭になっても潟港として存続していた様子がうかがえるからである。ラグーンの出入り口となる高津川の河口は、川が砂丘を突き破ることで自然に開削されたものだが、これにより高津港は、いわば天然の掘り込み式港湾として存在していたと捉えられよう。高津川河口域にあったラグーンは、現在では埋め立てにより姿を消しているが、明治期の地籍図に確認できる「船入」という小字名の分布する一帯が、かつての高津港の碇泊地¹³ 高津川河口域のラグーンだったと見られる（前掲【図1】・後掲【図8】参照）。

右に見た高津港の地形的特徴は、おそらく中世段階に遡及できるものと考えられる。¹⁵ したがって、中世とは一線を画す近世の高津港の特徴は、沿岸に設けられた御船蔵や船見番所といった港湾施設にあると考える。

すなわち、港に設けられた各種港湾施設のうち、ドックである御船蔵が特定の場所で施設化するのは、十六世紀中葉～十七世紀前半における城下町の建設に伴ってのことと指摘されている。この指摘を踏まえると、高津港の御船蔵も、近世の津和野城下町の建設に伴って、資材を運ぶ船の数とその往來が増大したことを受けて設置されたと考えられ、高津港の近世的な特徴を示していると思われる。また、船見番所は港湾管理事務所と目されるが、高津港の船見番所は津和野藩のものしか置かれていないため、ここから津和野藩による高津港の一元的な管理・掌握が実現していた様子がうかがえる。港湾の管理事務所自体は中世段階でも存在していたと思われるが、次章で見るように中世段階の高津港には諸権力が関与していたため、特定の権力による一元的な港湾空間の管理・掌握

は実現できていなかったと考えられる。したがって、津和野藩の船見番所の存在は、高津港の近世的な特徴を最もよく示していると考えられるのである。前述したように、高津港は天然の掘り込み式港湾として存在していたが、このような港湾は土砂の埋積に対する恒常的な浚渫を必要とした。近世段階の高津港は、津和野藩によって一元的に管理・掌握されていたため、津和野藩が恒常的に浚渫することで土砂の埋積を防ぎ、港の維持が図られていたと見られよう。

高津港の港湾施設には、これらに並んで御武器蔵・御米中場・御紙蔵・蠟座が見えるが、いずれも津和野藩の軍事・商業に関わる施設である。高津港には、津和野藩の施設が集中的に設けられていた様子が看取されるが、これも藩が港湾空間を一元的に管理・掌握していたことの表れと捉えられよう。また、沿岸へ通じる道沿いには、集落（町）も描かれていることが確認できる。集落は沿岸の藩施設から区分された場所にあることに着目すると、近世の高津港では港湾施設と集落とが津和野藩によってトータルにゾーニングされていた様子も看取でき、この点も高津港の近世的な特徴をよく示していると考えられる。

二 高津川・益田川河口域の中世港湾

前章では、「石見国高津川水域大絵図」（以下、「大絵図」と呼称する）を素材に、近世段階の高津港の様相について考察した。これを踏まえて本章では、中世段階の高津港の様相について追究するとともに、中世の高津川・益田川の河口域に形成された三つの港の関係性について検討する。

1 中世の高津港

冒頭で述べたように、最近新たに発見された中世文書により、十三世紀前半には高津川本流の河口域にも港が成立していたことが明らかになった。中世段階の高津港の様相を追究するにあたり、まずはこの史料を

検討してみよう。

【史料2】「益田實氏所蔵文書」

石見国長野庄内高津郷務間事、就去年七月十一日御下知状、相尋地頭兵衛尉盛宗候之処、陳狀副代々御下知案如此候、子細見状候歟、而雜掌以

去年御下知状、一向彼郷津湊等不相交地頭之由訴申之、何様可候乎、

以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

延応二年四月廿六日 相模守重時（北条重時）裏花押

進上 齋藤兵衛入道殿

石見国長野庄内高津郷の郷務をめぐる地頭と莊園領主（雜掌）との相論につき、六波羅探題北方の北条重時が、評定衆の齋藤長定に対し、鎌倉の評定への披露を依頼した書状である。¹⁶傍線部を見ると、莊園領主側は高津郷の「津湊等」に地頭を関わらせないように訴えていることがわかる。このことから、高津川本流の河口域に所在した高津郷には、十三世紀前半までに「津湊等」＝港が成立していたことが明らかになる。これまで中世の高津郷に港があったことを示す史料としては、「高津浦屋敷銭・船役料」という文言が見える、天正十九年（一五九二）の益田元祥領打渡検地目録¹⁷が知られている。しかし、【史料2】の発見により、高津港の存在はそれよりも三世紀半以上も遡ることが確実になったのである。

さて、【史料2】には「彼郷津湊等」と見え、高津郷には複数の港が存在したことが確認できる。津も湊もどちらも港を表す語句だが、立地条件に応じて呼称が使い分けられたと指摘されている。¹⁸すなわち、津は海辺や河川内に立地し、水上交通の中継地になる港に付けられる傾向があるのに対し、湊は河川が海に注ぐ河口域に設けられ、外洋海上交通と内陸河川交通の結節点となる港に付けられることが多いのである。

る。この指摘を踏まえると、「彼郷津湊等」という表現は、高津郷には津と湊という立地条件の異なる複数の港が存在することを示している¹⁹と理解できよう。

【史料2】の「彼郷津湊等」をこのように理解できるとすると、「大絵図」に描かれた近世の高津港は「湊」に当たると考えられ、中世の高津郷の「湊」もほぼ同じ場所に存在したと推定できよう。一方、「津」に当たる港だが、これも右の指摘を踏まえると、「大絵図」に「大渡シ」と記載された高津村の渡し場²⁰付近は、その候補地の一つになりうると考えられる（図5参照）。この点に関して、矢田俊文氏は、中世の港の物資流通の中心は橋ないしは渡し²¹のそばにあったという事実を喚起しているが、この矢田氏の指摘も右の推測の補強材料になる。したがって、中世の高津郷の「津」の一つは、この付近にあったと推定しておきたい。

このように中世の高津郷には、高津川の河川内の津と河口域の湊という複数の港が存在したわけだが、これらの港はそれぞれ異なる港として別個に存在したと見るよりも、立地条件の違いによる機能差にもとづいて複合化していたと把握する方が妥当と考える。²²すなわち、川港＝内陸への結節点となる津と海港＝外部への結節点となる湊とがリンクすることで、高津港としての交通と物資流通が全体的に機能していたと捉えられ、これが中世の高津港の様態だったと考えられるのである。

【史料2】の傍線部に戻ろう。ここからは、地頭と莊園領主との間で高津郷の「津湊等」の管理をめぐる争いが起きていた様子²³がうかがえる。このことから、十三世紀前半時の高津港には地頭と莊園領主の双方が関与しており、どちらか一方による一元的な管理・掌握がなされていないことが知られるが、このように港に関わる諸権力が錯綜するような状態こそが、中世段階に固有の港湾のあり方だったと考えられる。そして、地頭と莊園領主による高津郷の「津湊等」の管理をめぐる争いは、その収益をめぐる争いでもあったと考えられるが、彼らは具体的にいか

なる収益を得ることができたのだろうか。このことを考えるうえで、次の史料が注目される。

【史料3】「益田金吾家文書」⁽²⁴⁾

〔弁法橋 文永六 四 十二〕

長盛申石見国益田本郷津料・浮口事、^(道智) 狛僧正御房去比御入滅候之間、件御領彼御分候、仍于今進之候了、急有御尋可被申左右候、恐々謹言、^(華・二六九) 「文永六年」

四月十二日

法橋範政

益田荘の荘園領主（本家）である園城寺円満院の坊官だった範政が発給した書状の案文である。範政はこの書状で、狛僧正が死没したことにつき、彼の収益だった「益田本郷津料・浮口」の新たな納付先について問い合わせているが、この「益田本郷津料・浮口」という文言が注目される。この文言から、益田本郷の津では「津料」と「浮口」が徴収されたと考えられるが、「津料」は津の利用料と見られ、一方の「浮口」とは河川を上下する物資に対する通航料と指摘されている。⁽²⁵⁾ 益田本郷の津とは、具体的にどこの港を指しているのか明らかにならないが、沖手港ないしは中須港のことと想定される。⁽²⁶⁾ すると、十三世紀半ばの沖手港ないし中須港では「津料」と「浮口」が徴収され、それらが荘園領主の収益になっていたことが知られるが、高津港でも同様に「津料」と「浮口」が徴収されていたと考えられよう。また、高津港には「湊」もあったことを想起すると、「湊料」も徴収されていたと考えられる。したがって、おそらく高津郷の地頭と長野荘の荘園領主は、高津港の管理に関与すること、これらの収益を得ることができたと考えられよう。

このように中世の高津港では、「津料」・「湊料」・「浮口」が徴収されたと見られるが、十三世紀前半にこれらの収益をめぐる領主間の相論

が起きていることに鑑みると、当該期には高津港の交通と物資流通は活況を呈していた様子がうかがえよう。しかし、これらを実際に担った人びとの姿については、史料の制約があり判然としない。ただ、戦国期の史料となるが、「温泉津恵瑠寺旧記」の記述のなかにわずかながらこれを垣間見ることができる。

「温泉津恵瑠寺旧記」とは、島津氏との合戦のために九州に出陣していた豊臣秀吉のもとを訪れるべく、日本海沿岸沿いに九州へ向かった細川幽斎が、天正十五年（一五八七）五月に石見国温泉津を訪れた際の記録である。⁽²⁷⁾ これによると、温泉津を訪れた幽斎は、油屋妙珍をはじめとする二十名余りの商人たちの歓待を受け、恵瑠寺にて歌物語や百韻連歌などを楽しんだ様子が確認できるが、これらの商人のなかに高津屋宗兵衛なる人物が見える点が注目される。彼は「高津屋」という屋号を名乗っているが、当時の屋号は恒常的な取引先や出先の拠点を示す可能性が高いと指摘されている。⁽²⁸⁾ この指摘を踏まえると、彼は高津港と恒常的に取引をしていた廻船商人だったと考えられる。いずれにせよ、十六世紀後半には西日本海海域を舞台に活動した高津港に関わる廻船商人の存在が確認できるわけだが、高津港の交通と物資流通は十三世紀前半には活況を呈していたことに鑑みると、このような廻船商人の存在は十三世紀にも認めてよいと思われる、このような人びとが高津港の交通と物資流通の担い手になっていたと考えられるのである。

ところで、「大絵図」には、柿本神社の門前に上市・中市・下市が描かれており、門前市が形成されていた様子が確認できる。前述したように、柿本神社がこの絵図に描かれた場所に移転した時期は延宝九年であるから、門前市もそれに伴って形成された可能性がある。しかし、この門前市は高津村の大渡しⅡ中世高津港の津に隣接している点に着目すると、もともとは津の集落（町）として存在していたとも考えられる。⁽²⁹⁾ 中

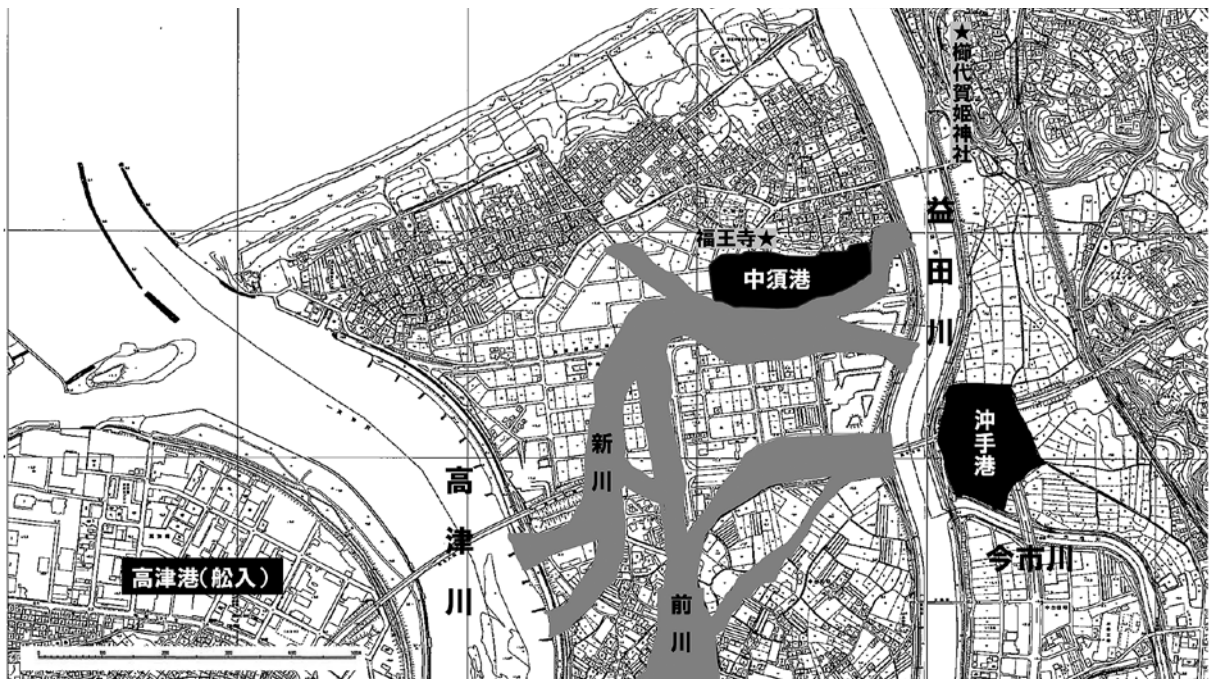
世前期以来、高津港は活況を呈していたと見られることから、それを構成した津の集落も賑わいを見せていたと思われる、高津港を拠点に活動した廻船商人たちもその住人になっていたと推測できよう。

2 「益田港湾圏」という視角

続いて、前節の考察を受けて、中世の高津川・益田川の河口域に形成された沖手港・中須港・高津港の関係性について検討する。【図8】は、中世段階に益田川に合流していた高津川の支流「前川」と新川の推定流路と、これら三つの港の位置関係を示したものである。

中世の高津川と益田川の流域には、それぞれ長野荘と益田荘という二つの荘園が形成されていた⁽³¹⁾。当然のことながら、沖手港・中須港・高津港もこれらの荘園の領域に含まれていたが、沖手港と中須港は益田荘に、高津港は長野荘に含まれていた。したがって、前二者は益田荘の年貢積み出し港として、後者は長野荘のそれとして機能したことは間違いないと思われる。井上寛司氏は、中世の荘園の成立に伴い、これに対応する個別の港が整備され、専属の流通センターになったと指摘するが、中世の海上輸送業者の存在形態に鑑みると首肯しがたい。

すなわち、中世の荘園には梶取と呼ばれた海上輸送業者が存在し、自己の属する荘園の年貢輸送を担っていた。しかし、彼らはその一方で、荘園年貢輸送とは無関係に展開した広域的な地域間の輸送・交易にも携わっており、決して荘園的な支配に拘束されない⁽³³⁾荘園領主に対する従属関係に縛られない存在だったことが明らかにされている。したがって、沖手港・中須港・高津港にもこのような梶取が存在したはずだが、彼らによって海上交通および物資流通が担われた以上、これら三つの港がそれぞれの荘園の専属の流通センターになっていたとは考えにくいのである。これら三つの港は、長野荘と益田荘共有の流通センターになっていたと理解するべきだろう。



【図8】 高津川・益田川河口域の中世港と中世高津川の支流
(2,500分の1「益田市都市計画図」Ⅲ-OD 82-1に加筆)

高津川・益田川河口域に所在した三つの港をこのように理解できるとすると、このことは取りも直さず、これら三つの港(町)は併存しながら有機的に結びつき、一つの港湾圏を形成していたことを示すと考えられる。この点に関して、伊藤幸司氏は、中世日本最大の国際貿易港博多の機能は都市博多と博多湾に点在する港町とが相互に補完関係を形成することで成立しており、中世の博多湾は都市博多を中心に湾内に点在する港町が有機的に結合して一つの港湾圏(港湾都市)を形成していたと指摘している⁽³⁵⁾。博多湾と比較するとスケールは劣り、また河口域の事例となるが、中世の高津川・益田川河口域でも同様の事態が展開したのではなからうか⁽³⁶⁾。残念ながら、中世の高津川・益田川河口域に所在したこれら三つの港(町)が、有機的に結びついていたことを具体的に示す史料は得られない。しかし、近世の史料になるが、安永二年(一七七三)から翌年にかけて高津川本流の河口が塞がった際、高津港の廻船は新川を通じて益田川へ出たことが確認できる⁽³⁷⁾。おそらく中世段階でも、このように高津川の支流を介して、高津川・益田川河口域の三つの港の間を船や筏が行き来していたと考えられる。したがって、このような人とモノの往来を通じて、中世におけるこれら三つの港(町)は有機的に結びつき、一つの港湾として機能していたと推測できよう。本稿では、これを「益田港湾圏」と捉えたい。

中世の高津川・益田川河口域に「益田港湾圏」が形成されていたとすると、これは西日本海交通・流通の一大拠点になっていたと推測される。近世初頭の史料になるが、元和五年(一六一九)八月に作成された「石見国古田領舟役加子役帳」⁽³⁸⁾は、この推測の傍証になるものとして注目される。

本史料は、浜田藩古田家が支配する領域のうち、海に接する益田・三隅・浜田の三組ごとに各港の船持人とその船の規模(船数・積載量)、そして各港の水夫の人名を記載し、そのうえで積載量の合計と水夫人数の合

計に応じた船役と水夫役の銀納高を記載した徴税基礎台帳である。いま、「益田港湾圏」の規模を検証するうえで注目すべきは、益田組の記載である。本史料については、倉恒康一氏による詳細な分析⁽³⁹⁾があるので、この成果を参照しながらその内容を確認してみよう。

益田組には、船役が課せられる船が所属する港と、水夫役が課せられる水夫が所属する港を合計すると八港(ただし、地名の記載が無い一件は除く)が確認できる。これらのうち、中須港を指すと思われる「中津」が、船数七艘・積載量計五九〇石・水夫数八人で、組内で最大規模の港だったことが知られる。また、近世の港湾に関する情報が豊富な地図として最も古く遡ることができる正保石見国絵図には、益田組の港湾として中須・津田・土田の三か所が記載されているが、後二者が「舟かかり無之」とあるのに対して、中須だけは「所ノ舟入置」とあることから、倉恒氏は中須港が地理的にも組内で優位にあったと指摘している。前章で掲げた【史料1】の波線部にも、新川を堰留めする以前の中須浦には廻船が頻繁に出入りし、浦町が賑わっていた様子が述べられているが、これは右の二つの史料からうかがえる中須港の様子と合致している。

ここで、ほかの二組にある港のうち、中須港と同様に正保石見国絵図のなかで舟かかりが可能とある港を探してみると、三隅(三隅組)と長浜・浜田(浜田組)を見つけることができる。いずれの港も、各組のなかで船数・積載量・水夫数ともに有数の港であることが確認できるが、中須港を合わせたこれら四港のなかでは、浜田港が船数十六艘・積載量計一〇四二石・水夫数四十九人で、すべてにおいて他港を圧倒していることがわかる。したがって、近世初頭の浜田藩では、浜田港が突出した規模を持つ港だったことになるが、中須港は三隅港とほぼ同規模の港で、浜田港に次ぐ規模を持つ港だったことが確認できる。この事実を踏まえると、近世初頭の中須港は、西日本海海域において浜田港や三隅港とともに基幹港湾としての地位にあった様相がうかがえよう。そして、「石

見国古田領舟役加子役帳」の作成時期に鑑みると、こうした中須港の様相は中世後期に遡及できることは確実に考えられる。すると、このような中須港を構成要素として抱え、また同じく構成要素の高津港も活況を呈した港だったと見られることから、少なくとも中世後期には、「益田港湾圏」は西日本海海域における基幹港湾Ⅱ西日本海交通・流通の一大拠点になっていたと理解するのが至当と判断されよう。⁽⁴⁰⁾

十五世紀後半に成立した『海東諸国紀』の「日本国紀」には、朝鮮に通航した石見国の国人の一人として、「益田守」藤原久直なる人物が挙げられている⁽⁴¹⁾。しかし、この人物は実在したわけではなく、対馬の宗氏が朝鮮との貿易を拡大するために創り出した架空の人物Ⅱ偽使だったと考えられている⁽⁴²⁾。だが、宗氏が「益田」の人物を偽使に選んだという事実は、「益田港湾圏」が宗氏に強く意識される港湾だったことを示していると考えられ、中世後期の「益田港湾圏」は対馬をも交易圏に含む西日本海交通・流通の一大拠点になっていた様相が、このようなどころからも垣間見られるのである。

おわりに

以上、本稿では、「石見国高津川水域大絵図」が文化元年の高津川の洪水による河口の移動を受けて、河口を起点に設定されていた藩境の再確認作業の結果を津和野藩側が記録するべく、その翌年から文化八年の間に作成されたことを指摘し、そこに描かれた近世段階の高津港の様相を考察した。そして、その考察を手がかりに、最近存在が確認された中世の高津港の様相解明にアプローチするとともに、中世の高津川・益田川の河口域に形成された沖手港・中須港・高津港の関係性について検討した。本稿で明らかにした中世の高津港の様相と、中世の高津川・益田川の河口域に形成されたこれら三つの港の関係性についてまとめると、次のようになる。

中世の高津港とは、高津川の河川内の津と河口域の湊の二つの港が、立地の違いによる機能差にもとづいて複合化した港だったと把握できる。高津港の交通と物資流通は、川港Ⅱ内陸への結節点となる津と海港Ⅱ外部への結節点となる湊とがリンクすることで機能していたと考えられる。中世の高津港では、「津料」・「湊料」・「浮口」が徴収されたと目され、十三世紀前半にこれらの収益をめぐって地頭と荘園領主との間で相論が起きていたことに鑑みると、当該期には高津港の交通と物資流通は活況を呈していた様子がうかがえる。そして、高津港を含む高津川・益田川の河口域に形成された三つの港は、益田荘と長野荘共有の流通センターになっていたと見られる。これら三つの港(町)は、併存しながら有機的に結びつき、一つの港湾圏Ⅱ「益田港湾圏」を形成していたと捉えられ、少なくとも中世後期には、西日本海海域における基幹港湾Ⅱ西日本海交通・流通の一大拠点になっていたと理解できるのである。

中世の高津港の様相については、今後、関連する新たな史料の発見と発掘調査によって、より詳細な事実が究明されることが期待される。また、「益田港湾圏」についても、他地域の港湾との比較や関係を検討するとともに、これを存続させた高津川・益田川流域の後背地との関係もあわせて検討することで、より具体的な様相を解明することが今後の課題になると考える。これらの作業により、益田地域あるいは西日本海海域における「益田港湾圏」の位置づけが明確になり、中世の西日本海交通・流通の様相をいっそう深化させることができると思われる。本稿がそれへ向けた一階梯となれば、望外の喜びである。

註

(1) 沖手遺跡と中須東原・西原遺跡の概要については、長澤和幸「中須東原遺跡と港湾遺跡群」(中世都市研究会編『日本海交易と都市』山川出版社、二〇一六年)、村上勇「高津川・益田川河口部港湾遺跡の交易ネットワーク」(同上書)、佐伯

- 昌俊「高津川・益田川河口部の港湾遺跡の様相」(鳥根県古代文化センター編『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』鳥根県教育委員会、二〇一八年)参照。
- (2) 佐伯昌俊同右論文は、この到達点を示している。
- (3) 市村高男「古代・中世における日本海域の海運と港町」(前掲『日本海交易と都市』所収)。
- (4) 「益田實氏所蔵文書」延応二年(一二四〇)四月二十六日付北条重時書状。本史料を含む益田實氏所蔵の中世文書については、田中大喜・中島圭一・中司健一・西田友広・渡邊浩貴「益田實氏所蔵新出中世文書の紹介」(国立歴史民俗博物館研究報告「二二二集、二〇一八年」)参照。
- (5) 本絵図は、二〇一八年八月二十三日に同博物館にて調査した。調査にあたり、同博物館学芸員の倉恒康一氏のご高配に与った。記して謝意を表す。
- (6) 寛永八年正月二十八日付中須浦惣代等口上覚。「沖手遺跡」(益田市教育委員会、二〇一〇年)は、二十二点の「中須自治会所蔵文書」の翻刻を掲載してあり、本史料もそのなかに含まれている。また、中野賢治「近世後期の潟湖と浦の生業」(『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』鳥根県古代文化センター、二〇一五年)は、さらに四点の「中須自治会所蔵文書」を翻刻するとともに、その目録を掲載しており、全容の把握に便宜が図られている。
- (7) 鳥根県美濃郡高津町小学校編『高津町誌(一)』(復刻版、高津の歴史と文化を考える会、二〇〇九年)六十九頁および九十七頁参照。
- (8) 同右書六八頁参照。
- (9) 「浜田領・津和野領入相中浜出入一件」(中須町自治会、一九八四年)。なお、本書は、文化元年の高津川の河口移動を受けて翌年正月に勃発した、高津村と中須村の中浜での引き網漁をめぐる相論の一部始終を記録した、当時の益田浦大年寄の大賀兵左衛門の手記を翻刻したものである。
- (10) 本絵図には、「新湊切口」の西側に「古湊口」という記載も確認できる。同右史料には、文化元年の洪水によって河口が東へ移動したことにつき、それまでの河口が塞がったことが記されている。このことに鑑みると、「古湊口」とは、洪水以前の河口を示していると思われる。
- (11) 同右史料によると、洪水の影響で塞がれた以前の河口を掘り返すべく、津和野藩の「見分役人中」が文化二年の三月下旬に高津村に来ていたことが確認できる。このことを踏まえると、本絵図の高津川河口に記された「丑三月廿八日見分」という記載は、彼らが河口を見分したことを示しており、これにもとづいて藩境の再確認作業が行われたと考えられよう。
- (12) 佐藤竜馬「前近代の港湾施設」(市村高男ほか編『中世港町論の射程 港町の原像 下』岩田書院、二〇一六年)参照。なお、同論文は、港湾施設に焦点を当てながら、前近代の港湾の形態と変遷を包括的に考察している。本節の港湾に関する記述は、すべてこの成果にもとづいている。
- (13) 『角川日本地名大辞典32 鳥根県』(角川書店、一九七九年)の地誌編「益田市」項には、「高津川はもと吉田平野を縦断して益田川と河口近くで合流して日本海に注いでいたが、津和野藩主亀井政矩は元和三年(一六一七)に防衛経済上の見地から、高津川の河口を自領にもつために河道付替えの工事を敢行した」(七五六～七五七頁)との記述が見える。また『日本歴史地名体系第33巻 鳥根県の地名』(平凡社、一九九五年)の「高津村」項にも、同様の記述を確認できる。しかし、後掲註(17)史料によって、戦国期には高津川の河口に港が存在したことが確認でき、それはさらに十三世紀前半にまで遡ることが、前掲註(4)史料によって明らかになる。したがって、十七世紀初頭の河道の付け替え工事によって、高津川が益田川から分離することではじめて日本海に注ぐ独自の河口を持つようになったとは考えにくい。高津川の河口は、中世段階から独自に存在していたと見る方が自然だろう。服部英雄「今市船着場遺跡の歴史的な役割」(『中世今市船着場跡文化財調査報告書』益田市教育委員会、二〇〇〇年)がすでに指摘しているが、これらの記述は矢富熊一郎「益田町史 下巻」(益田公民館、一九五二年)七四五頁の記述に依拠したものと見られ、今後さらなる検証を要すると考える。なお、服部英雄同論文によると、現在の高津川河口域周辺は砂丘が形成されにくい地形で、その高さも低いという。こうした地形的特色は中世段階まで遡るものと思われ、この点からも高津川は近世以前から独自の河口を持っていたと考えられる。
- (14) 広島大学図書館所蔵「益田市地図」所収「高津村」。
- (15) 成立時期が文安五年(一四四八)とも宝徳二年(一四五〇)頃とも指摘されている「正徹物語」には、「石見の高津といふ所也、此所は西の方には入海有り」という記述が確認できる(『中世益田・益田氏関係史料集』(益田市・益田市教育委員会、二〇一六年)三八八号)。このことから、高津川河口域のラグーンは中世段階には存在していたことが確実と考えられる。なお、本史料は渡邊浩貴氏よりご教示いただいた。
- (16) 田中大喜ほか前掲資料紹介でも述べたが、『吾妻鏡』と「関東評定衆伝」(『群書類従』第三輯所収)によると、本史料の宛先の斎藤長定は前年の十月十一日に死去していることから、本史料は長定の死没年についても一石を投じる文書として注目される。なお、同前掲資料紹介では、本史料に表れる地頭の名前を「盛憲」としているが、「盛宗」が正しい。ここに訂正したい。
- (17) 「益田家文書」天正十九年正月十一日付石見美濃郡益田元祥領打渡検地目録(『大日本古文書 益田家文書之一』三三九号)。
- (18) 岩橋孝典「十六世紀後半における山陰地域水上交通の一断面」(前掲『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』所収)。なお、市村高男「中世後

- 期の津・湊と地域社会」(中世都市研究会編『津・泊・宿 中世都市研究3』新人物往来社、一九九六年)も、津と湊の違いに言及している。
- (19) 前掲註(17)史料に見える「高津浦」とは、高津郷に所在した津・湊に複数の港の総称と理解したい。
- (20) 『高津町誌(一)』一二四頁によると、この渡しは往来が頻繁だったため、津和野藩が特別の施設を設けて大渡場として整備し、明治二十五年(一八九二)の高津橋の架設まで機能していたという。
- (21) 矢田俊文「中世水運と物資流通システム」(同『地震と中世の流通』高志書院、二〇一〇年、初出一九九九年)。
- (22) 市村高男前掲註(18)論文も、「一つの港湾でも、津と湊の機能を複合させている例が多い」(九十六頁)と指摘している。
- (23) この点については、佐藤竜馬前掲論文も指摘しているほか、拙稿「南北朝期の越前と室町幕府」(田中大喜・長谷川裕子・村木二郎編『歴史研究の最前線一九号 地域史の可能性』総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館、二〇一七年)でも、敦賀を事例に同様の指摘をした。
- なお、中世後期になると高津川・益田川河口域は益田氏の支配領域下に入るため、高津港も益田氏によって管理・掌握されるようになったと考えられる。
- (24) 文永六年四月十二日付法橋範政書状案(中世益田・益田氏関係史料集二五号)。
- (25) 秋山伸隆「戦国大名毛利氏の流通支配の性格」(同『戦国大名毛利氏の研究』吉川弘文館、一九九八年、初出一九八二年)参照。
- (26) 井上寛司「中世都市石見益田の成立」(前掲『日本海交易と都市』所収)は中須東原・西原遺跡に中須港を想定しているが、沖手遺跡に沖手港の可能性も排除できないと考える。
- (27) 「温泉津恵琿寺旧記」は、温泉津町誌編さん委員会編『温泉津町誌 上巻』(温泉津町、一九九四年)ならびに『中世益田・益田氏関係史料集』八四九号に翻刻が掲載されている。なお、『温泉津町誌 上巻』によると、本史料は昔の伝承をもとに近世になって作成されたものと推定されるが、その記載内容はそれなりに事実を反映したものと考えられ、戦国期の様相を伝える貴重な史料と評価できるという。
- (28) 長谷川博史「中世水運と松江 城下町形成の前史を探る」(松江市ふるさと文庫15、松江市教育委員会、二〇一三年)。
- (29) この点に関して、矢田俊文前掲論文は、港の町を構成する経済施設として橋・渡しが存在すると指摘している。
- (30) 前川と新川の旧流路は、国土地理院のウェブサイトで公開されている、昭和二十二年(一九四七)に米軍によって撮影された益田市の空中写真と、治水地形分類図を参照して推定した。なお、「中須自治会所蔵文書」寛政八年(月日欠)付兒玉伝三郎口上覚には、前川は「古川筋」と見え、十八世紀末には廢川になっていたことが確認できる。
- (31) 長野荘と益田荘の立荘については、西田友広「中世前期の石見国と益田氏」(前掲『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』所収)参照。
- (32) 井上寛司前掲論文。
- (33) 藤本頼人「中世前期の梶取と地域間の交流」(同『中世の河海と地域社会』高志書院、二〇一一年、初出二〇〇四年)参照。
- (34) 前節において、十三世紀の高津港には西日本海域を舞台に活動した廻船商人がいたことを推測したが、右に見たような梶取の姿はこれに具体的なイメージを与えるだろう。また、十六世紀後半に確認できる高津屋宗兵衛のような廻船商人たちは、こうした梶取の末裔と考えられよう。
- (35) 伊藤幸司「港町複合体としての中世博多湾と箱崎」(『九州史学』一八〇号、二〇一八年)。
- (36) 伊藤幸司同右論文も、「こうした事例(中世博多湾のような事例―筆者註)は他地域でも規模の大小を問わず、存在するのではないか」(六十一頁)と指摘している。
- (37) 前掲註(9)史料。
- (38) 本史料は、『明治大学刑事事博物館資料 第四集』(明治大学刑事博物館、一九七九年)に翻刻が掲載されている。
- (39) 倉恒康一「戦国期の石見国浜田と領主権力」(前掲『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』所収)。
- (40) 中世段階においても、高津川と益田川の河口域は恒常的な浚渫を必要としていたと考えられることから、ジャンク船のような大型船が直接「益田港湾圏」に入港していたとは考えにくい。大型船の入港は、基幹港湾であるための要件にはならないと考えるべきだろう。
- (41) 田中健夫訳注『海東諸国紀』(岩波書店、一九九一年)一六三頁。
- (42) 佐伯弘次ほか『海東諸国紀』日本人通交者の個別的検討』(『東アジアと日本』三号、二〇〇六年)の「石見州」項(岩成俊策氏執筆)参照。
- (43) 最近、西石見地域に関する新出の中世史料の発見が相次ぎ、資料紹介が盛んになされている。代表的なものとして、中司健一「山口県文書館寄託『益田高友家文書』中世分の翻刻と紹介」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二五号、二〇一五年)、倉恒康一・佐伯徳哉・中司健一・西田友広・本田博之・目次謙一「『石見肥塚家文書』中世分の翻刻と紹介」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二八号、二〇一八年)、田中大喜ほか前掲資料紹介、久留島典子前掲論文、小倉嘉夫・倉恒康一・中司健一・長村祥知・西田友広・目次謙一「大阪青山歴史文学博物館所蔵『吉見家文書』の翻刻と解説」(『大阪青山大学紀要』一一巻、二〇一九年)

などがある。

(国立歴史民俗博物館研究部)
二〇二〇年一月二七日受付、二〇二〇年七月九日審査終了)